

湖国まるごとエコ・ミュージアムづくり「ワークショップ」プロジェクト

平成 17 年度モデル事業「しが・ほんもの体験ネットワーク」公開交流会 開催概要

滋賀県では、自然と人の絆を大切にしたい、自然・人・地球が輝く、暮らしや仕事のスタイルを提案する「湖国まるごとエコ・ミュージアム」づくりを推進しており、その一環として、子どもたちが「ほんもの」と出会う機会を提供する活動の広がりを支援しています。

平成 18 年 3 月 13 日、NPO と行政との協働について県外での取組報告を聞くとともに、参加者が日頃の取組や関心、疑問などについて意見交換する機会として、公開交流会を開催しました。京都橋大学文化政策学部の木下達文助教授にコーディネーターを依頼し、県内外からの話題提供者を交え、文化施設を中心として滋賀県の「ほんものの文化や芸術」を発掘・保存・活用し次世代に継承していく取組の意味や課題について話し合いました。

実施日：平成 18 年 2 月 13 日（月） 13：30～16：30

会場：滋賀県立草津文化芸術会館（草津市）

テーマ：しがのほんものと次世代との出会いを広げる

コーディネーター：京都橋大学文化政策学部助教授 木下達文さん

趣旨説明：子どもの美術教育をサポートする会代表 津屋結唱子さん

話題提供者：

特定非営利活動法人 S T スポット横浜アート教育事業部主任学芸員 松尾子水樹さん

神奈川県教育委員会教育局高校教育課教育企画担当主幹兼指導主事 井口貴夫さん

MIHO MUSEUM 学芸員 畑中章良さん

草津市立笠縫東小学校 校長 馬場輝代さん

信楽公民館長 大平正道さん

参加者数：80 名

県外の事例として、神奈川県において NPO と教育委員会の協働により、小中学校や高等学校において行われる「アートを活用した新しい教育活動の構築事業」について聞きました。この事業は、総合的な学習の時間や芸術、人文学科系の科目へのアーティストの派遣、授業にアートを活用する取組に関心を持つ小中高校の教諭を対象としたプロの演劇人、現代美術のアーティストを講師としたワークショップの実施、事業を進めるために必要な調査研究や情報収集などを内容としており、神奈川県ボランティア活動推進基金 21 の協働事業負担金制度に採択されたものです。

公開交流会では、共に事業を進めている特定非営利活動法人 S T スポット横浜アート教育事業部主任学芸員 松尾子水樹さんと神奈川県教育委員会教育局高校教育課教育企画担当主幹兼指導主事 井口貴夫さんから、事業の概要やプログラムづくりの過程が紹介されるとともに、体験プログラムを展開していく上での課題が提示されました。さらに、NPO、行政というそれぞれの立場から、協働で事業を進め



実際の授業のようすを映像で見る



全員がステージ場上がり議論に参加

る上でのメリットや問題点が紹介されました。

県内からは、子どもたちのほんもの体験プログラムを提供しているMIHO MUSEUMの学芸員である畑中章良さん、プログラムを实践してこられた草津市立笠縫東小学校の校長である馬場輝代さん、そして地域で体験プログラムの展開に協力している信楽公民館長の大平正道さんを招き、それぞれの具体的なプログラムの内容や子どもたちの生き生きとした反応が紹介されました。

後半のディスカッションでは、体験プログラムを展開していく上での予算的な裏付けが不安定であるという問題点や、行政側の担当者の人事異動による取組への影響、体験プログラムの成果をどのように評価していくのかなどの議論が行われました。

なお、公開交流会の実施にあたっては、滋賀県文化振興事業団主催事業の協力を得て、事業団の自主事業である「気軽にどこでもアート交流事業」(県内文化施設が集まり、ブースでの出展や舞台での実演を行い、各施設がもつ地域との連携ノウハウを交流する場)を活用し、多くの文化施設関係者や文化ボランティア、学校関係者等の参加を得ることができました。

【参加者アンケートから】

- ・私自身が小学生・中学生のときにホンモノを感じる機会があったらとうらやましく思う。自分をとりまくもの、コトに心の、腹の底から感動し、尊敬できるということを経験できる、しておくというのはとても大切。
- ・人とのつながりが大切な事業だと感じた。学校、NPO(団体)、施設が関わり、特徴を活かしての活動がされ、何よりも子どもたちの喜ぶ姿が報告としてみられることができた。できることなら美術館、博物館へもっと来館してもらい、美術や資料という“本物”も体験してほしい。
- ・一口に言えば“本物”体験できれば、それに越したことはないが、教育という範疇をぐっと広げ、学校という場(廃校でもよい)で市民(社会人)、高齢者、専門家、街のかじや、自己主張できる人をくっつける実験場へと活用していければ、教育を遊びを通してバリアフリーに、皆が学べる場へと変身できるのでは。
- ・ボランティアの育成について教えて欲しい。人だけでなく、物、文化施設との交流が必要。
- ・アートを活用した教育活動やほんもの体験は非常に重要で、その実績や成果が発表されたが、まだ始まったばかりだと思う。滋賀県でもすべての地域のすべての学校で、特定の学年を対象とするのではなく、継続して子どもたちが活動できる様にすべきだと思う(積み上げ)。また、そのとき、文化施設・NPO・ボランティア・地域・アーティストが対応できるか。
- ・今後の展開について。今後活動が進んでゆくとともに、プロジェクトに関わっている人々の立場の違いによる思惑の違い、哲学の違いというものが顕在化してくるのではないかと。イベントの進行と並んで、プロジェクトにかかわる様々な立場の人々が腹を

- 割りあって話し合い、立場の違いを超えて共有できる部分、互いに同床異夢をみつつも連携できる部分などを浮き彫りにしてゆく必要があるような気がする。そうすることによってプロジェクト全体の「哲学」も明確なものになり、プロジェクト継続のために必要な「ノウハウの蓄積と伝達、共有」につながってゆくのではないかと思った。
- ・社会教育の分野にいるが、学校との連携にいつも苦慮している。今回の事例をどのように噛み砕いて、どのように実践するか、今一度勉強したい。
 - ・日頃の授業からはなれ、トピックス的にするというのは、一年間の中で数回しか行えない。連携授業が子どもたちの楽しみになるのは良いと思うが、普段の授業でも取り組める、取り込んでいけるようなことも必要ではないか。
 - ・地域住民の意識にアプローチし、文化のあり方、その価値を共有していくことは永遠に残るだろう大きな課題。そのために、自らの文化活動の評価は避けては通れない。



フラットな会場に対話をめざした交流会

詳しい発言内容は、「しが・ほんもの体験ネットワーク発言概要」(pdfファイル)をご覧ください。